

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

The Treatment of Johann Strauss in the Ballet "Rund um Wien" (1894) by Josef Bayer

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 若宮, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/522

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



ヨーゼフ・バイヤー作曲のバレエ《ウィーン巡り》(1894)

— ヨハン・シュトラウスの位置づけ —

The Treatment of Johann Strauss in the Ballet “*Rund um Wien*” (1894) by Josef Bayer

若 宮 由 美

WAKAMIYA, Yumi

In 1894 the ballet “*Rund um Wien*” was composed by Josef Bayer in order to celebrate the 50th anniversary of the musician life of Johann Strauss junior, and performed in the Viennese Court Opera. The 3rd scene of this ballet consists of the motifs of Strauss. On October 13 of the premiere the applause to Johann Strauss did not die down after the end of the 3rd scene. The music of the 3rd scene is contained in melodies of Johann Strauss’s “*Sinngedichte*” op.1 and the other early works. These quotations praised the starting point of Johann Strauss. Also after that, this work continued being performed at the Viennese Court Opera over ten years. The ballet may have been revised after the premiere.

1 序

1894年10月13日、ウィーン宮廷歌劇場でフランツ・ガウル Franz Gaul (1837-1906)¹⁾とアルフレート・ヴィルナー Alred Willner (1859-1929)²⁾の台本によるバレエ《ウィーン巡り *Rund um Wien*》が初演された。音楽は宮廷歌劇場バレエ指揮者のヨーゼフ・バイヤー Josef Bayer (1852-1913)、振付はバレエマイスターのヨーゼフ・ハスライター Josef Hassreiter (1845-1940)³⁾が担当。このバレエは、ヨハン・シュトラウス2世 Johann Strauss junior (1825-99)の音楽家生活50周年の祝賀作品として制作された。本論は、バレエ《ウィーン巡り》とヨハン・シュトラウスの関連について論じるものである。

2 シュトラウス音楽家生活50周年祝賀行事

ヨハン・シュトラウス2世は、父ヨハン・シュトラウス1世 Johann Strauss senior (1804-49)と母アンナ Anna Streim (1801-70)の長男として、1825年10月25日にウィーンで生れる。父の反対を押し切る形で、1844年10月15日にヒーティングの「カジノ・ドームマイヤー Casino Dommayer」で音楽家デビューを果たす。若干19歳であった。このデビュー・コンサートでは、オペラの序曲や父の作品とともに、シュトラウス2世の自作のワルツ〈どうぞごひいきに *Gunst-Werber*〉op.4、〈デビュー・カドリーユ *Debut-Quadrille*〉op.2、ポルカ〈心ゆくまで *Herzenslust*〉op.3、そし

キーワード：ヨーゼフ・バイヤー、ヨハン・シュトラウス、バレエ、ウィーン宮廷歌劇場
Key words : Josef Bayer, Johann Strauss, ballet, Viennese Court Opera

てワルツ〈記念の詩 *Sinngedichte*〉op.1の4曲が、上記の順番で演奏され、観客の喝采を得た⁴⁾。新聞各紙も熱狂的な記事を掲載。10月19日付の*Der Wanderer*誌（No.252）でフランツ・ヴィースト Franz Wiestは、「おやすみなさいランナー、こんばんはシュトラウス1世、おはようシュトラウス2世！」という有名な言葉を記した。ヴィーストの言葉は、初期ウィーン音楽を牽引したヨーゼフ・ランナー Joseph Lanner（1801-43）とシュトラウス1世の後継者として、シュトラウス2世を容認するものである⁵⁾。デビュー・コンサートにおいて、シュトラウス2世は4曲の自作を発表したが、その中の目玉作品はop.1のワルツ〈記念の詩〉であった。

それから50年後、ヨハン・シュトラウス2世がデビューした10月15日前後に、彼の音楽家生活50周年を祝う一連の祝賀行事が舉行された。まず、先陣を切って10月12日（金）に、ヨハン・シュトラウス自身による14作目のオペレッタ《りんご祭り *Jabuka*》が、アン・デア・ウィーン劇場で初演された⁶⁾。このオペレッタは、「祝賀オペレッタ *Die Jubiläums-Operette*」(1894年10月13日*Local-Anzeigen der "Presse"* No.281, p.1)として、各新聞で大々的に取りあげられた。公演ポスターにも円形に縁取られたシュトラウスの肖像画が左上に描かれた。

翌10月13日（土）には、本稿で論じるバレエ《ウィーン巡り》がウィーン宮廷歌劇場で初演される。次の14日（日）には、午後12時半からウィーン楽友協会ウィーン宮廷歌劇場管弦楽団とウィーン男声合唱団による「Fest Concert veranstaltet zur Feier des 50-jährigen Jubiläums des Tochtichters Johann Strauss（作曲家ヨハン・シュトラウスの50周年祝賀演

奏会）」が開催される。この演奏会では、冒頭に作家ベルガー男爵 Alfred Freiherr von Berger(1853-1912)による「プロローグ *Prolog*」が、宮廷女優ホーヘンフェルス Stella Hohenfels(1854-1920)によって朗読され、以降はシュトラウス作品が次々と演奏された⁷⁾。演目は、〈こうもり序曲 *Ouverture zur Operette "Die Fledermaus"*〉（指揮：宮廷歌劇場副楽長 Johann Nepomuk Fuchs）、〈酒女歌 *Wein, Weib und Gesang*〉op.333（合唱版、指揮：ウィーン男声合唱団指揮者 Eduard Kremser）、〈《騎士パースマーン》からバレエ音楽 *Ballet-Musik aus der Oper "Pazman"*〉⁸⁾（指揮：宮廷歌劇場監督 Wilhelm Jahn）、〈エジプト行進曲 *Egyptischer Marsch*〉op.335（指揮：Fuchs）、アルフレート・グリュンフェルト Alfred Grünfeldによるピアノ演奏（〈シュトラウスのワルツによるパラフレーズ *Concert-Paraphrase über Johann Strauss'sche Walzer-Motiven*）=新作、ならびに〈ペルシャ行進曲 *Persischer Marsch*〉op.289のピアノ版）、〈美しき青きドナウ *An der schönen blauen Donau*〉op.314（合唱版、指揮：Kremser）。

同じく10月14日の夕方5時半からは、エドゥアルト・シュトラウス Eduard Strauss(1835-1916)が率いるシュトラウス楽団により、「Zur Feier des 50-jährigen Jubiläums des Tondichters Johann Strauss Fest-Concert（作曲家ヨハン・シュトラウスの50周年を祝う祝賀演奏会）」が開催された⁹⁾。この演奏会では、シュトラウス2世の最初のオペレッタ《インディゴ *Indigo*》の序曲、ワルツ〈もろびと手を取り *Seid umschlungen Millionen*〉op.443、オペレッタ《りんご祭り》から〈情景のクブレ *Bilder-Couple*〉（=初演）、ポルカ〈野火 *Wildfeuer*〉op.313、歌曲〈甘い涙 *Dolci*

pianti)¹⁰⁾、〈りんご祭りのワルツ〉(=初演)¹¹⁾、オペレッタ《目隠し遊び *Blindekuh*》の序曲、エドゥアルト編曲によるヨハン・シュトラウスのメドレー〈花冠 *Blüthenkranz*〉(=初演)が演奏された。〈花冠〉は、冒頭モチーフにヨハン2世の幼少期の作品〈最初の楽想 *Erster Gedanke*〉WoO、2番手にop.1の〈記念の詩〉を配し、それ以後は最新作までのメロディーを年代順に並べた作品であった¹²⁾。冒頭の〈最初の楽想〉は、1881年8月10日付の*Fremden-Blatt*紙で、「ヨハン・シュトラウスが6歳の少年だった頃に作曲した作品」と報じられ、「その翌日には多くの新聞にGustav Levy出版社による広告が掲載された」作品である(MAILER 1999: 91)。この楽曲は信憑性に論争の余地が残るが、1894年の時点でシュトラウス家のメンバーが、〈最初の楽想〉を「ヨハン・シュトラウス2世も一番古い楽曲」と認識していたことは明白である。それゆえ、ヨハンの作曲家生活を回想する楽曲に採用されたと推測できる。シュトラウス楽団の演奏会では、最新作《りんご祭り》からの抜粋と、ヨハンの足跡を辿るメドレー作品によって、シュトラウス2世の「過去」と「いま」を結び付けている。

デビュー日の10月15日、ウィーンのイーゲル通りにあるシュトラウス邸は、朝からお祝いにくる人でごったがえした。夜10時からは、リング通り沿いのグランド・ホテルで華々しい晩餐会が開かれた。

そして、一連の祝賀行事は、シュトラウスの代表作《こうもり *Die Fledermaus*》を10月28日(月)にウィーン宮廷歌劇場で上演して締めくくられる¹³⁾。

1894年10月3日付の*Fremden-Blatt*紙に、「すべての祝賀行事に関して、問い合わせは、シュ

トラウス祝賀委員会(「楽友協会」内事務局)が受け付ける」(MAILER 1998: vol.7: 248)と記されていることから、上述した祝賀諸行事は「シュトラウス祝賀委員会 *Comité für die Strauß-Feier*」が取り仕切ったことがわかる。ヨハン・シュトラウス2世は、すべての行事に出席した。

この他に、「シュトラウス祝賀委員会」とは関係のない祝賀行事が、街の至るところで開催された。「ウィーン音楽が演奏されるレストランや酒場において、昨日[10月15日]、祝われるべき人[シュトラウス]に思いを馳せなかったところはひとつもない」(MAILER 1998: vol.7: 284, 1894年10月16日*Fremden-Blatt*紙の引用)。この日には、フォルクスガルテン、クアサロン、ロナッハー、造園協会、ゾフィーエンザール、ホプフナー(以前のドームマイヤー)、ブラーターの第2コーヒーハウスなど、ウィーンの名立たる娯楽場で、シュトラウスを祝う演奏がなされた。

ウィーンの各新聞は、*Der Floh*紙(10月14日Nr.41, p.1)の有名なカリカチュアをはじめ、*Neue Freie Presse*紙(10月12日Nr.10825, pp.1-2)、*Wiener Abendpost*紙(10月12日Beilage zur *Wiener Zeitung*, Nr.235, pp.1-2)、*Die Presse*紙(10月13日Nr.281, pp.1-2)、*Wiener Sonn- und Montags Zeitung*紙(10月15日Nr.42, pp.2-3)の文芸欄にて、ヨハン・シュトラウスの功績を称える記事を掲載した。

3 バレエ《ウィーン巡り》の概要

前章で記したように、バレエ《ウィーン巡り》は、ヨハン・シュトラウス2世の音楽家生活50周年の祝賀行事の一環として制作・初演された。制作の詳細は判明していないが、オーストリア国立図書館に所蔵されるバイ

ヤーの自筆譜（A-Wn: Mus.Hs.36105）には、「6月7日～7月末まで執筆」という書き込みがある。この楽譜には、第3～4景と第6景が含まれていることから、初演の3ヶ月前には、かなり作曲が進んでいたと考えられる。

《ウィーン巡り》は10月13日に初演されて以降も、ウィーン宮廷歌劇場のレパートリーとして再演を重ねた。初演当時の音楽監督ヤーンWilhelm Jahn（1835-1900）と次代マラー Gustav Mahler（1860-1911）の監督時代、すなわち1906年までの13年間の上演回数は64回にのぼる¹⁴⁾。

3.1 物語と登場人物

《ウィーン巡り》の登場人物と初演の配役を表1に示す。

表1：初演時の配役

役 名	ダンサー
Marie マリー	Pagliero嬢
Deren Vater マリーの父、かつての兵士、 現在は工場で働く	Mazzantini氏
Rudolf, Mechaniker ルドルフ、機械工、 マリーに熱をあげている	Frappart氏
Der Graf 伯爵、マリーに言い寄るが競馬で 全財産を失う	Rathner氏
Der Sportmann スポーツマン、競馬の勝者	Godlewski氏
Der gute Genius 守護天使	von Haentijens嬢
Ein Dämon 悪魔	Schleinker嬢
Ein Schauspieler 役者	Runziant氏
Ein Tanzmeister aus einem Vorort フォアオルト出身のダンスマスター	van Hamme氏
Der “Jockey-Club” ジョッキー・クラブ	Rathner嬢

初演の公演ポスターには、上記の登場人物の下に、「寓意的人物 Allegorische Figure」として、「慈悲、貴族、市民、芸術、精霊、オーストリア、ジョッキー、ブックメーカー、スターター、競馬の客、ウィーン市民の類型、委員会のメンバー、芸術家、労働者、召使い、債権者」という登場人物が列記されている。そのすぐ下には、「幻覚 Vision」と書かれた見出しがあり、「前世紀から現在までのオーストリアの軍隊」と説明されている¹⁵⁾。いずれも配役は記されていない。

次に《ウィーン巡り》の物語に目を向ける。*Wiener Zeitung*紙の記事に、バレエの物語が紹介されているので引用しよう。

「貧しいウィーンの娘Marieは、裕福な伯爵の誘惑に屈し、彼女を熱愛するRudolfをはねつけて父の家を去る。ところが、伯爵は競馬で全財産を失い、Marieは幸運な勝者である老スポーツマンのものとなる。競馬好きで無愛想な愛人とホイリゲを訪ねたMarieは、陽気に踊るが、そこで父とRudolfに遭遇する。しかし、二人はMarieを寄せ付けない。良心の呵責から、Marieはアルコールに依存していく。やがてMarieを不幸が襲う。債権者がMarieの全財産を持ち去り、召使いたちも彼女の元を去る。絶望したMarieは家を出て、ドナウ河に身を投げる。間一髪でRudolfが彼女を救い、Rudolfと父はMarieを許す。（中略）2つのフィナーレの場面は、脈絡なしに綴られる。しかしながら、現代に至るまでの、オーストリア史上のさまざまな時代の兵士による行進を通して、色鮮やかで生き生きとした軍事絵巻を繰り広げる。このバレエの中程に、『ウィーンのダンス音楽』の情景がはめ込まれていて、そこでシュトラウスのダンス・メロディーが次々と奏される」（1894年10月14

日 *Wiener Zeitung* 紙 Nr.237, p.6)。

この粗筋を見る限り、物語が祝祭に相応しいのかどうか、そしてさらには、長く上演され続けるバレエとしての恒久性があったのか、疑問がわく。*Der Vaterland*紙でも、「ガウルの功績によって魅力ある情景が連ねられたが、いわゆる『筋立て』はきわめて貧弱であった。もし衣装の豪華さが続かなかつたら、ひどく退屈したであろう」と書かれている(10月14日 Nr.282, p.6)¹⁶⁾。

3.2 バレエの構成

初演ポスターによれば、バレエ《ウィーン巡り》は初演時に「序景と7つの情景からなるバレエ」として上演された。ところが、初演から1週間後の第2回公演(10月20日)のポスターでは、「序景と8つの情景からなるバレエ」と表記されている。各情景のサブタイトルも、初演と第2回公演ではすべてが変更されている。《ウィーン巡り》の場面構成を表2に示した。

宮廷歌劇場の公演ポスターでは、第2回公演から10年後の1904年9月5日の第60回公演まで、「序景と8つの情景からなるバレエ」という表記が一貫して使用され、各情景のサブタイトルもまったく同じものが使われ続けている¹⁷⁾。ここで問題なのは、初演と第2回公演の間の「表記の変更」が、内容の変更を伴ったか否かである。

バレエの内容を確かめるには、台本ないし楽譜をみる以外に方法はない。《ウィーン巡り》の台本が販売されていたことは、初演ポスターの記載から明らかであるが、台本は現存しない。一方、楽譜としては、ハンプルクのCranz社から出版されたピアノ・スコア全曲版が残されている。この楽譜に出版年は記載されていないが、ライプツィヒのHofmeister社のカタログから類推することはできる。Hofmeister社は、ヨーロッパで出版された楽譜を網羅した販売カタログを毎月発行しており、1894年12月号にCranz社刊の《ウィーン巡り》ピアノ・スコアが掲載されている。したがって、Cranz社の楽譜が1894年

表2:《ウィーン巡り》の場面構成

	Cranz刊(1894)のピアノ・スコア	初演(10/13)のポスター	第2回公演(10/20)のポスター
表記	Grosses Ballet in sechs Bildern nebst einem Vorspiel	Ballet in 1 Vorspiel und 7 Bildern	Ballet in 1 Vorspiel und 8 Bildern
区分	Introduction	[表記なし]	[表記なし]
	Vorspiel	[表記なし]	[表記なし]
	1.Bild: In der Freudenau	1.Bild: [表記なし]	1.Bild: In der Freudenau
	2.Bild: Das Volk und seine Lieder	2.Bild: Wiener Lieder	2.Bild: Das Volk und seine Lieder
	3.Bild: [表記なし]	3.Bild: Bild mit Musik von Johann Strauss	3.Bild: Das goldene wiener Herz
			4.Bild: Ein Wohlthätigkeitsfest in der Rotunde (Die Wiener Tanzmusik)
	4.Bild: [表記なし]	4.Bild: [表記なし]	5.Bild: Im Salon
	5.Bild: [表記なし]	5.Bild: Nachtbild	6.Bild: An der Reichsbrücke
	6.Bild: [表記なし]	6.Bild: [表記なし]	7.Bild: Fürs Vaterland
		7.Bild: Grosser Militärmarsch	8.Bild: Das Kriegsglied
	Apotheose	Apotheose	Apotheose

に発行されたことは確実である。しかし、このピアノ・スコアの表紙には、“Grosses Ballet in sechs Bildern nebst einem Vorspiel（6つの情景ならびに序景からなる大バレエ）”と記されており、楽譜においては、情景が6つに区分されている。その区分を表2の左欄に示した。

表2にあげた「楽譜」「初演」「第2回公演」の情景区分を比較した場合、「第1情景」はフロイデナウの情景で三者が一致する¹⁸⁾。尚、本稿では“Bild”を「情景」と訳す。初演と第2回公演のポスターには、いずれも第1情景で“*Jocky-Galopp*”が踊られる」と記されている。また、Cranz社から出版された“*Jocky-Galopp*”（A-Wn: F42.Welleba.308. Mus.）は、《ウィーン巡り》からの抜粋曲であり、第1情景（ピアノ・スコア全曲版）の冒頭をそのまま抜粋していることがわかる。したがって、“*Jocky-Galopp*”を踊る場面はすべてが同一情景とみなすことができる。

「第2情景」についても、三者は一致するとみなすことができる。楽譜をみると、第2情景には、ウィーナー・リートや初期ウィーン音楽の作曲家のメロディー¹⁹⁾が引用されており、古き良き時代のウィーン音楽が中核をなす。楽譜からみる限り、この情景がバレエ全体のなかで最も長大である。第2回公演時の「第3情景」が、初演時の「第2情景」を分割したものか、新しい材料によるものかは判断できない。

そして、初演と楽譜の「第3情景」は紛れもなくヨハン・シュトラウスの音楽による情景であり、シュトラウスの曲目を連ねた構成からみて、第2回公演の「第4情景」がそれに相応する。それ以降の情景については、各区分を比較対照する決めて手はない。ただし、

*Wiener Zeitung*紙に、第5情景について「ライヒスブリュッケ協でのならず者の乱入は嫌悪を催した」（1894年10月14日Nr.237, p.6）とあるので、初演の「第5情景」と第2回公演の「第6情景」は同じ場面と推測される。ライヒスブリュッケはドナウ河にかかる橋である。おそらく、ここはMarieが自殺を図る場面である。表2では、場面对応する部分を濃くした。

*Die Presse*紙の初演評に、「バレエ自体については、改作なども含め、もっとよく討議されるべき」と書かれている（1894年10月14日Nr.282, p.11）。また、オーストリア国立図書館に収蔵される断片的な自筆譜に、出版譜と一致しない音楽がある。これらのことから判断して、いずれかの段階で何らかの改訂がなされた可能性はある。しかし、改作・変更について論じるためには、さらなる調査が必要である。したがって、次章以降は「シュトラウスの音楽を用いた情景」の考察を中心に論を進めていく。

4 シュトラウスの音楽による、シュトラウスのための情景

4.1 引用の状況

初演の第3情景、いわゆる「シュトラウスの情景」には、先にも示したように、数多くのシュトラウス音楽が引用されている。その原曲名は、大部分がCranz社刊の楽譜に記されている。表3に引用の状況を示した。表中で色がついている曲は、Cranz社の楽譜に曲名が記されていないものである。

表3：《ウィーン巡り》第3情景に引用されたシュトラウス音楽

mm	Original works of Johann Strauss					Rund um Wien		Original Motif
	Op.	Title	Genre	Key	Meter	Key	Meter	
1	321	Die Publicisten	Walzer	A	2/2	A	4/4	Intro-A
18		? ^{*1}				a		
26	321	Die Publicisten	Walzer	A	2/2	A	4/4	Intro-A'
36		?				trans	4/4	
44	292	Aus den Bergen	Walzer	Eb	3/4	Eb	3/4	Intro-A
93	340	Freuet euch des Lebens	Walzer	Eb	3/4	Eb	3/4	W2B ^{*2}
109		?	Fanfaren			(F)	2/4	
112	308	Par force	Polka schnell	Eb	2/4	Eb	2/4	Trio-B
130		?	Fanfaren			F	2/4	
131	302	Die Zeitlose	Polka française	Bb	2/4	Bb	2/4	Polka-A
149	333	Wein, Weib und Gesang	Walzer	Eb	4/4	Eb	4/4	Intro
173		?	Wazler		3/4	Bb	3/4	
189	391	Gavotte der Königin	Gavotte	Eb	4/4	Eb	4/4	Gavotte
201	391	Gavotte der Königin	Gavotte	Ab	4/4	Ab	4/4	Trio
242	391	Gavotte der Königin	Gavotte	Eb	4/4	Eb	4/4	Gavotte
262	362	Fledermaus-Polka	Polka	D	2/4	D	2/4	Polka-A
275		Fledermaus Overture		E	4/4	D	2/4	
	363	=Fledermaus-Quadrille	Quadrille					Final-A
284		?				trans	2/4	
285		Methusalem Act3 No.18		C	2/4	C	2/4	
	376	Generalslied						
		=Methusalem Quadrille	Quadrille					Final-A
293	313	Wildfeuer	Polka française	F	2/4	F	2/4	Trio-B
3.Bild “Domayers Casino (ドームマイヤー・カジノ)”								
310	1	Sinngedichte	Walzer	Bb	3/4	Bb	3/4	Intro-B
326	1	Sinngedichte	Walzer	Bb	3/4	Bb	3/4	Intro-C
331	1	Sinngedichte	Walzer	F	3/4	F	3/4	W1A
349	1	Sinngedichte	Walzer	F	3/4	F	3/4	W1B
365	64	Fantasiebilder	Walzer	Eb	3/4	Bb	3/4	W3A
381	64	Fantasiebilder	Walzer	F	3/4	F	3/4	W4B
407		?				trans	3/4	
5.Bild “Kahlenberg (カーレンベルクの丘)”								
411	79	Die Gemüthlichen	Walzer	Eb	3/4	Eb	3/4	W3B
427		?				-C	3/4	
429	73	Frohsinns Spenden	Walzer	C	3/4	C	3/4	W3A
6.Bild “Tegetthoff Monument (テーゲットホフ記念碑)”								
445	82	Johaniskäfern	Walzer	F	3/4	F	3/4	W3B
461	90	Orakelspruch	Walzer	E	3/4	E	3/4	W1B
476	90	Orakelspruch	Walzer	E	3/4	E	3/4	W3A
7.Bild “Wien an der Aspernbrücke (アスペルン橋近くのウィーン)”								
501	314	An der schönen blauen Donau	Walzer	D	3/4	D	3/4	W1A
533	314	An der schönen blauen Donau	Walzer	D	3/4	D	3/4	W1B
554	314	An der schönen blauen Donau	Walzer	D	3/4	D	3/4	W1A

8.Bild “Belvedere（ベルヴェデーレ）”									
588	339	Louischen Polka	Polka française	C	2/4	C	2/4	Eingang	
591	339	Louischen Polka	Polka française	C	2/4	C	2/4	Polka-A	
607	339	Louischen Polka	Polka française	C	2/4	C	2/4	Polka-B	
620	339	Louischen Polka	Polka française	C	2/4	C	2/4	Polka-A'	
637		?				trans	3/4		
641	298	Hofballtänze	Walzer	Eb	3/4	Eb	3/4	W1A	
673	300	Flugschriften	Walzer	Bb	3/4	Bb	3/4	W3A	
688	307	Wiener Bonbons	Walzer	Eb	3/4	Eb	3/4	W2B	
10.Bild “Ringstrasse（リング通り）”									
705	410	Frühlingsstimmen	Walzer	Bb	3/4	Bb	3/4	W1A	
745	333	Wein, Weib und Geasng	Walzer	Ab	3/4	F	3/4	W1B	
760	334	Königslieder	Walzer	F	3/4	F	3/4	W1A	
777	334	Königslieder	Walzer	F	3/4	F	3/4	W2B	
11.Bild “Neue Burg mit Museen（新王宮と博物館）”									
793		?				Bb	3/4		
796	340	Freuet euch des Lebens	Walzer	Bb	3/4	Bb	3/4	W1A	
829	342	Neu Wien	Walzer	Eb	3/4	Eb	3/4	W1B	
845	342	Neu Wien	Walzer	Gb	3/4	Gb	3/4	W2B	
866	342	Neu Wien	Walzer	Bb	3/4	Bb	3/4	W1A	
883	427	Donauweibchen	Walzer	Eb	3/4	Eb	3/4	W1A	
913		Fledermaus Act1/Act3 No.12	Marsch	C	2/4	Eb	2/4		

[注] *1) ? = 原曲不明の箇所

*2) W2Bのような表記におけるWはWalzerの略記。 3) trans. = 移行部

結局、「シュトラウスの情景」には、計27曲のシュトラウス音楽が引用されている。バイヤーは、1885年の《ウィンナ・ワルツ *Wiener Walzer*》と1892年の《ドナウの水の精 *Donaunixe*》でシュトラウス音楽を引用した経験を持つ。しかし、上記2作で引用された楽曲はop.300前後に集中しており、op.100以下の初期作品が引用されることは皆無であった。《ウィーン巡り》においては、シュトラウスの祝祭を意識して、op.1を筆頭に初期作品が織り込まれた点が特徴である。

「シュトラウスの情景」は10場面から構成されているが、場面に対しても“Bild”という言葉が充てられていて、入れ子の構造を持つ。表3に示した「場」は楽譜表記に準じた。表に記載のない第1、2、4、9場は楽譜に記載がないため、特定の手掛かりがない。

特筆すべきは第3場である。50年前、まさに「カジノ・ドームマイヤー」でシュトラウスはデビュー演奏会を開催した。そこで演奏されたop.1を同じ場面で再現することは、シュトラウスに対する最高の祝辞となったであろう。

初演の公演ポスターでは、op.73, op.391, op.1, op.339, op.64, op.79, op.314の曲名とダンサーの名前が示されている。そして、op.314の〈美しく青きドナウ〉の後には、“*Huldigungs-Walzer* (祝賀ワルツ)” (ポプリ) という記載がある。ポプリとは、いまでいう「メドレー」である。第641小節以降の9曲のワルツが祝賀メドレーに相当するとみなすことができる。いずれもシュトラウスの代表作であり、「バイヤー氏はいろいろなものを彼のやり方でポプリに仕立てた」(MAILER

1998: 261, 1894年10月14日*Illustriertes Wiener Extrablatt* Nr.282の引用)。「バイヤー氏の音楽は、とても魅力的に作られており、とくに賞賛すべきは、第3情景でシュトラウスのダンス音楽を彼がうまくつなぎあわせている点である」(*Wiener Zeitung* Nr.237, p.6)。

表2に示した通り、第2回公演ポスターでは、「シュトラウスの情景」は「ロトゥンデにおける慈善祭(ウィーンダンス音楽)」というサブタイトルに変更されている。

4.2 初演の様子

1894年10月13日には、第3情景の上演中にも、シュトラウスに対するわれんばかりの拍手喝采が沸き起こったという。

「金文字でヨハン・シュトラウスと書かれた豪華な横断幕が張られていた。(中略)やがてヨハン・シュトラウス2世の〈美しく青きドナウ〉が鳴り響くと、有名なシュトラウスのメロディーに包まれながら、青い照明に照らしたされたドナウの水の精たちが、魔法のように踊った。このシーンでは、古いフェルディナント橋とその辺りの水辺の風景が示された。[舞台の]上の方に飾られた『市民の冠』から、巨大な扇子が飛び出てきて、ワルツ〈美しく青きドナウ〉の最後の数小節は、ほほかき消されてしまった。まさに同時に、舞台下からは巨大な花束がでてきた。その真ん中にはバラの花で縁取られた円形の肖像画が据えられ、同じく舞台下から登場した妖精たちが、長いリボンで肖像画を引っ張った。するとそこには、明らかにヨハン・シュトラウスにそっくりの顔が描かれていた。バレリーナたちが優雅なワルツを踊っている間じゅう、われんばかりの喝采が歌劇場を包んだ。この優美な祝賀のための場面は、すさまじい熱狂を巻き

起こした。上演途中にすべての人が歓声をあげ、1階左のロージェを振り返った。そこにシュトラウスが家族とともに座っていた。巨匠はロージェの奥に隠れるように座っていたが、観客は彼がいることを周知していた。今日、劇場を満杯にした優雅な紳士淑女は、電気が走ったかのように、座席から飛び上がり、いつまでも拍手を贈り続けた。シュトラウスはなかなか姿を現さなかったが、ついにロージェの手すりの辺りに立つ彼の姿を観客は目にする事ができた。熱狂は止まることがなかった。巨匠の周りでさらなる拍手の嵐が起こり、彼は青白くがあるが、幸せそうな笑みを浮かべながら立ち続けなければならなかった。(中略)歓声はとめどなく続いた。人びとは、ミュンヘン王立歌劇場での似たような光景を思い起こしたであろう。つまりは、国王ルートヴィッヒの隣りに座ったりヒャルト・ヴァーグナーが、同じような喝采を浴びたことを。シュトラウスもひとりの王様、つまりはワルツ王を伴ってロージェに座っている。しかし、彼は甘やかされた天才の尊大な態度ではなく、ひとりの愛されるべきウィーン人の幸せな顔つきで、愛すべきウィーン人たちに向かって挨拶をした。拍手が鳴り続ける中、監督のヤーンが巨匠のロージェに姿を現し、彼を舞台に導いた。ここでようやく、劇場のほぼすべての人が、シュトラウスの姿を見ることが可能になった。今日は、彼自身が自分にこれほどの人気があったのかと疑ったに違いない。カーテンが閉められると、彼に祝辞を述べるために芸術家たちが舞台上の彼の周りを取り囲んだ。それから、彼は喜びに満ちた興奮状態で自分のロージェに戻っていった。回りに群がる友人たちに軽い拒絶を示しながら、『充分すぎるよ。私はこれに見合

うことはしていない。充分すぎないかい?』という言葉を残した」(1894年10月14日*Neue Freie Presse* Nr.10827, p.14)。

第3情景の熱狂の後、舞台は再びバレエの上演に戻った。当然のことながら、観客のバレエ自体への関心は散漫になった。

5 結論

《ウィーン巡り》の制作にはかなりの資金が費やされ、とくに舞台背景と舞台装置は手の込んだものとなった。シェーンブルン、ベルヴェデーレをはじめとする、ウィーンの新旧の名所が次々と舞台上に現われ、新王宮と博物館を臨むマリア・テレーシア広場の場面(初演の第3情景第10場)では、まだ完成していない未来の風景が描かれた。前章で示した通り、初演の第3景ではシュトラウスを称える舞台装置が準備され、シュトラウスのための祝祭を前面に押し出した仕様であった。確かにシュトラウスはウィーンの人びとの日常生活に溶け込みながら、音楽家としての地位を確立していった。彼の音楽家生活50周年を称えるために、大仕掛けの作品が制作された背景には、彼がウィーンの人びとの心の拠り所として君臨してきた事実がある。しかし、この作品が10数年後までずっとシュトラウスを称えた舞台装置を使い続けたかは疑問である。物語を持つバレエの中に、シュトラウスを称える場面が無理やりはめ込まれた感は否めない。この点については、さらに研究を続ける必要がある。

バイヤーの音楽については、新聞各紙に賛否両論が掲載されているが、どの新聞でもシュトラウス音楽を扱う腕前は高く評価している。《ウィーン巡り》の3つのナンバー、すなわち“*Jocky-Galopp*”、“*Hoch Wien*”、“*Marien-*

Walzer”は単独曲として出版された。すべての楽譜がオーストリア国立図書館に所蔵されており、参照の結果、抜粋曲にはシュトラウスのモチーフは出てこないことが確かめられた²⁰⁾。したがって、抜粋曲はバイヤーのオリジナル曲といえる。“*Jocky-Galopp*”は、Cranz社刊のピアノ・スコア全曲版の第1情景の冒頭、“*Hoch Wien*”は第6情景と一致する。しかし、“*Marien-Walzer*”には、出版されたピアノ版の“Inroduction”のメロディーが認められるものの、スコアにないメロディーも含まれている。この点も、バイヤーによる改作の可能性を示唆するものであるが、その考察は今後に研究に譲ることにする。

[注]

- 1) Franz Gaulは、肖像画家、舞台美術家、台本作家。当初は戦闘画家。その後、ウィーン宮廷劇場の衣装画家を経て、宮廷歌劇場の美術衣装部門の責任者。
- 2) Alfred Maria Willnerは、作曲家、台本作家。《ウィーン巡り》は初期の作品。シュトラウス2世のオペレッタ“*Die Göttin der Vernunft*” (1897)の台本を手がけるが成功には至らず、1907年Leo Fallの“*Die Dollarprinzessin*”で成功を収める。代表作は、Franz Leharの“*Der Graf von Luxemburg*” (1909)と“*Zigeunerliebe*” (1910)。
- 3) Josef Hassreiterは、ウィーン生まれのダンサー、振付師。1888年バイヤー作曲の“*Puppenfee*”で成功を収め、90年から宮廷歌劇場バレエマイスター。
- 4) 本稿におけるヨハン・シュトラウス2世の作品名は、日本ヨハン・シュトラウス協会2006に従った。
- 5) ランナーは1843年没。彼の時代が終わった意味で、「おやすみ」と表現している。
- 6) 《りんご祭り》は、Max Kalbek (1850-1921)とGustav Davis (1856-1951)の台本による3幕物のオペレッタ。セルビアの「りんご祭り」を題材に

ヨーゼフ・バイヤー作曲のバレエ《ウィーン巡り》(1894)

- している。初演指揮は、アン・デア・ウィーン劇場
楽長Adolf Müller (1839-1901)。
- 7) ベルガーの「プロローグ」を朗読作品とする根
拠は、1894年10月3日付の*Wiener Zeitung*紙
(Nr.227, p.5)で“sprechen”と書かれていること
による。
- 8) この表記は10月14日の演奏会ポスターのおける
表記。一般的には“*Ritter Pásmán*”。
- 9) この演奏会は、シュトラウス楽団のシーズン最
初の演奏会。
- 10) 演奏会では、歌としてではなく、チェロ奏者の
AuberとSchmidhuberが演奏。
- 11) このワルツは、出版時には〈あなたが好きよ！
Ich bin dir gut!〉op.455と題された。
- 12) エドゥアルトによる楽曲は、〈1844年から最新作
までを年代順に並べたヨハン・シュトラウスのワ
ルツよる花冠 *Blüthenkranz Johann Strauß'scher
Walzer in chronologischer Reihenfolge von 1844
bis auf die Neuzeit*〉op.292として、ハンプルクの
Augst Cranz社から出版された。
- 13) この上演は、ウィーン宮廷歌劇場楽長Johann
Nepomuk Fuchs (1847-1927) 指揮。
- 14) 1894年(13回)：10/13(土)、20(土)、23(火)、
26(金)、11/5(金)、10(土)、17(土)、20(火)、
27(火)、12/4(火)、14(金)、20(木)、29(土)；
1895年(20回)：1/14(月)、25(金)、2/11(月)、18
(月)、3/9(土)、22(金)、28(木)、4/19(金)、5/9(木)、
15(水)、28(火)、7/25(木)、28(日)、31(水)、
8/13(火)、9/26(木)、10/1(火)、24(木)、12/6(金)、
17(火)；1896年(9回)：1/30(木)、2/26(水)、3/19
(木)、4/13(月)、5/16(土)、9/1(火)、30(水)、
10/27(火)、11/5(木)；1897年(5回)：1/19(火)、
2/8(月)、17(水)、9/3(金)、11/16(火)。ここまで
は、単独上演。1898年以後は、同じ日に他作品と
組み合わせて上演されている。1898年(3回)：
1/25(火)、31(月)、8/4(木)；1899年(3回)：5/21(日)、
10/21(土)、12/9(土)；1900年(2回)：5/2(水)、
6/12(火)；1901年(1回)：11/28(木)；1902年(1回)：
3/14(金)、1903年(1回)：9/2(水)；1904年(2回)：
4/25(月)、9/5(月)；1905年(2回)：4/13(木)、
10/30(月)；1906年(2回)：3/1(木)、25(日)。
- 15) 物語の時代設定は「現在」。
- 16) 物語の貧弱さを補うものとして、各新聞では
Anton Brioschi (1855-1920) の舞台装置とGaulの
衣装を賞賛している。「豪華に描かれた舞台装置
(フロイデナウと新旧ウィーンの風景を伴った舞
台装置)にもっともあたたかい賛辞が贈られた」
(1894年10月14日*Wiener Zeitung* Nr.237, p.6)。
- 17) 1905年4月13日の第61回公演では、新聞広告に
「序景と8つの情景からなるバレエ」と表記されな
がら、“3.Bild: Das goldene Herz”を除外し繰り
上げた7つの情景だけが掲げられていて、表記に
矛盾がある。1906年3月1日公演も同様。
- 18) フロイデナウはプラターにある競馬場。
- 19) 引用曲は、C.Lorens: “*Pfört di Gott du alte
Zeit*”, J.Siroy: “*Ich bin a echter Weaner*”, A.
Krakauer: “*Mein Liebchen wohnt am Donaustrand*”,
C.Millöcker: “*Bettelstudent*”, J.Stern: “*Dös is hakt
Weanerisch*”, F.Fink: “*Die Damenkapelle*”, A.Göller:
“*Jessas so sol*”, Krakauer: “*Die wahre Liebe ist das
nicht!*”, J.Schrammel: “*Wien bleibt Wien*”, C.Lores:
“*Habn's a Idee*”, W.Rab: “*Wiener Hamur*”, Siloy:
“*Das hat kein Göthe g'schrieb'n, das hat ka'Schiller*”,
Schrammel: “*All's in uns recht*”。*Wiener Zeitung*
紙は、バイヤー作曲による「[バレエ] “*Wiener
Walzer*” のプラター・シーンの少し色あせたコ
ピー」(1894年10月14日Nr.276, p.6)とこの情景を
酷評したが、*Neue Freie Presse*紙には「多くの
ウィーナー・リートを一流のオーケストラの演奏
で聴くことができる」(1894年10月14日Nr.10827,
p.8)と好意的に書かれている。
- 20) バイヤーによる1892年のバレエ《ドナウの水の
精》は全編を通じてシュトラウス音楽が引用され
ているが、このバレエからも抜粋曲の楽譜が出版
された。これらの楽譜は存在は知られているもの
の、楽譜自体はみつからない。若宮2010で論
じたように、バイヤーの抜粋曲がオリジナル・メ
ロディーによるかどうかが解決しなかった(若宮
2010: 241)。《ウィーン巡り》の抜粋曲がオリジナ
ルであることは、バイヤーの手法を知る上での参
考になる。

[Library Sigla]

A-Wn Österreichische Nationalbibliothek, Musiksammlung, Wien, Austria.

[使用楽譜]

BAYER, Josef

1894a *Rund um Wien. Grosses Ballet in sechs Bildern nebst einem Vorspiel von Franz Gaul und A.M.Willner*. Vollständiger Clavierauszug. Hamburg; Brüssel: Aug. Cranz.

1894b *Rund um Wien*. (第3景、第4景、第6景の自筆譜、スコア、不完全) A-Wn: Mus. Hs. 36104. Mus.

1894c *Marien-Walzer aus dem Ballet "Rund um Wien"*. Hamburg; Brüssel: Aug. Cranz. A-Wn: MS80692-4°. Mus.

1894d *Hoch Wien. Marsch aus dem Ballet "Rund um Wien"*. Hamburg; Brüssel: Aug. Cranz. A-Wn: MS88246-4°. Mus.

1894e *Jockey-Galopp aus dem Ballet "Rund um Wien"*. Hamburg; Brüssel: Aug. Cranz. A-Wn: F42.Welleba.308. Mus.

n.d. *Rund um Wien*. (自筆譜、スコア、不完全) A-Wn: Mus.Hs.36104. Mus.

HILMAR, Ernst (ed.)

1991-2006 *Strauss, Johann (Sohn): Sämtliche Werke in Wiedergabe der Originaldrucke*. 8.vols. Tutzing: Hans Schneider.

ROT, Michael (ed.)

1998- *Neue Johann Strauss Gesamtausgabe*. Serie I:Bühnewerke, Werkgruppe 2, Bd.8: *Das Spitzentuch von Königin* (2007). Wien: Strauss Edition Wien.

STRAUSS, Johann (Junior)

1931 *Prinz Methusalem*. Leipzig: Cranz.

[参照新聞] (いずれもA-Wn: Digitalisierte Ausgaben)

Das Vaterland; Der Floh; Die Bombe; Die Presse; Kikeriki; Neue Freie Presse; Wiener Sonn- und Montags-Zeitung; Wiener Caricaturen; Wiener Zeitung

[録音資料]

BAYER, Josef

2010 「ウィーン巡り」 in CD『シュトラウスと音楽家の仲間たち』日本ヨハン・シュトラウス協会2010年9月例会ライブ録音、ピアノ演奏：前田 拓郎、東京：日本ヨハン・シュトラウス協会。

[参考文献]

BLOM, Eric; 鍵山, 由美 [若宮, 由美] (訳)

1996 「バイヤー, ヨーゼフ」 in 『ニューグローブ世界音楽事典』東京：講談社. 第12巻, p.498.

HOFMEISTER (ed.)

1892 *Musikalisch-literarischer Monatsbericht*. Leipzig: Hofmeister. <http://www.hofmeister.rhul.ac.uk/2008/content/database/database.html>で閲覧.

KEMP, Peter

1989-96 *J.Strauss, Jr: Edition*. 52 vols. Hong Kong: Marco Polo Western.

2001 "Strauss", in SAIDIE, Stanley (ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2nd ed. 29 vols. London: Macmillan. Vol.24: 474-496.

LINHARDT, Marion

2006 "Strauß", in FINSCHER, Ludwig (ed.) *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*. 21 Bände. Kassel: Bärenreiter. Personenteil Bd.16: 11-54.

MAILER, Franz

1998 *Johann Strauß (Sohn). Leben und Werk in Briefen und Dokumenten*. Bd.7: 1894 (1998). Tutzing: Hans Schneider.

1999 *Johann Strauß. Kommentiertes*

ヨーゼフ・バイヤー作曲のバレエ《ウィーン巡り》(1894)

Werkverzeichnis. Wien: Pichler.

日本ヨハン・シュトラウス協会

2006 『ヨハン・シュトラウス 2 世作品目録』 東京:

日本ヨハン・シュトラウス協会.

OBERZAUCHER, Alfred

1999 “Bayer, Josef”, in FINSCHER, Ludwig (ed.)

Die Musik in Geschichte und Gegenwart. 21

Bände. Kassel: Bärenreiter. Personenteil Bd.2:

551.

若宮, 由美

2010 「ヨーゼフ・バイヤー作曲のバレエ《ドナウ

の水の精》: ヨハン・シュトラウスのモティー

フとの関連」 in 『埼玉学園大学人間学部紀要』

第10号. pp.231-243.

WAMBSGANZ, Ingrid

2002 *Franz Gaul (1837-1906). Figurinen für*

die Wiener Theater. Nürnberg: Verlag des

Germanischen Nationalmuseums.

WEINMANN, Alexander

1956 *Verzeichnis sämtlicher Werke von Johann*

Strauß Vater und Sohn. Wien: Ludwig Krenn.

1967 *Verzeichnis sämtlicher Werke von Joosef*

Strauß und Eduard Strauss. Wien: Ludwig

Krenn.

WIENER INSTITUT FÜR STRAUSS-FORSCHUNG

(ed.)

1990- *Strauß-Elementar-Verzeichnis*. Vol.1-7.

Tutzing: Hans Schneider.